

連載

フィールド・アイ

Field Eye

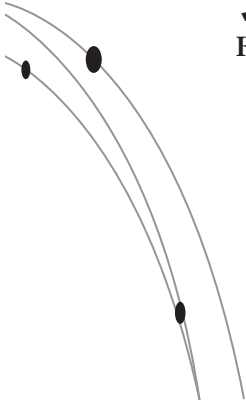
アムステルダムから——①

アムステルダム自由大学
ヤン R. マグナス

Jan R. Magnus

(訳) 大阪大学 生藤 昌子

Masako Ikefuji



オランダで博士課程学生であること

中等教育学校

オランダの12~18歳の少年少女は5年あるいは6年間の中等学校に通う。異なる水準の中等学校の中でも、VWOと呼ばれる高い水準の学校を無事終了した学生だけが大学への進学が許される。全体の約20~25%の(男子より女子学生のほうが多い)学生がVWOの卒業試験を終え、これらのほとんどの学生が18歳か19歳で大学に進学する。VWOの卒業試験は全国統一試験であり、どの地域のどの中等教育学校であるかにかかわらず最終学年のすべての学生に対して行われる。

VWOにはいわゆる4つのプロフィール(自然科学と工学や経済学と社会など、大まかな方向性を示すコース)があり、学生は大学入学のために適切なプロフィールを選んでいけば希望通り入学できる。大学入試はなく、VWOの卒業試験が大学入試の役割を果たしている。私の前職のティルブルグ大学では、VWOの卒業試験で数学のスコアが10のうち6以下ならば経済学プログラムに入学する学生が1年目を終えることは稀であった。志願者の数学のスコアが最低でも7であることが望ましいとされたが、この基準を置くことは許されず、すべての学生を受け入れなければならなかった。

学士と修士

学生は3年間の学士プログラム、その後1年か2年間の修士プログラムに進学する。オランダなどでは大学1年目から専門科目(経済学、法律、医学)を選

び、一般教育として他の分野を学ぶことはない。この教育システムの欠点は18歳の若い学生は何を学びたいのか、自分の得意分野は何か分からないことが多いことである。

1990年ポローニヤ宣言の素晴らしい点は、学生がヨーロッパ各国の異なる高等教育システム間で容易に移動できるようになったことである。ポローニヤ宣言を中心にヨーロッパ各国の教育改革がなされてきた。しかし、特にオランダの学生は学士を終えた大学から移動することはあまりない。これは残念なことで、一般的にオランダの大学は学部生に対して他の大学に移ることを奨励せず、事実、留まるよう勧めている。

学士を終えて大学を離れることは全く問題ない。しかし、これは一般的ではなく、我々は修士課程を修了しない限り、例えば経済学の履修を完全に終えたとは考えない。

博士課程

オランダの博士課程に入るためには、学生はプログラムに応募し入学の許可が必要である。学部生と異なり、ほとんどの博士課程の学生はとても国際的である。博士課程は3年間で、必要であれば、さらに1~2年継続することがある。

博士課程に入学が許可されると、通常、学生は大学に雇用され、いくらか収入が得られる。3年後もし学生が無事に博士号を得られれば、学生へ支払ってきた賃金は教育文化科学省より大学に返金されるが、これはあくまでも学生が博士号を取得できた場合だけである。明らかにこれは、大学側に対して博士課程の学生に博士号を取得させるようにするプレッシャーとなっている。この間違っ(例えば水準が達していない学生に博士号を取得させるような)インセンティブはかなり論争となってきたが、未だ解決策はない。

学生は指導教授(プロモーター)を1人、時には2人見つける必要がある。毎週1回あるいは数回学生と面談し、特に最初の年にはより厳密なガイダンスを行う指導教授もいる。しかし、このように定期的な面談はなく学生からのコンタクトを待ち、何カ月も指導をしない教授もいる。このコラボレーションには決まりはない。

50年ほど前の博士論文は、一つの課題について詳細に述べる複数の章をまとめた1冊の本であった。しかし今ではこれは稀で、一般的には全く関連のない3

本の論文から構成される。これらのうち1, 2本の論文は指導教授や他の博士課程の学生との共著であることはよくある。しかし、少なくとも1本の論文は単著であることが強く推奨されている。また、3本すべての論文が良いジャーナルに公刊されうる水準であることが求められる。

博士論文最終口頭試問

計画通りならば、学生は3年後にほぼ博士課程プログラムを終える。指導教授が良しとすれば、学生は3本の論文を正式な博士論文に編集し、博士論文最終口頭試問を迎える。

博士論文の最終口頭試問は国ごとに全く異なる。例えば英国では、博士論文口頭試問委員は指導教授（座長を勤めるが、審議には参加しない）、学生が所属する大学院から教授が1人、そして英国の他大学の教授が1人の、3人の学者が出席する非常に真剣な会である。口頭試問は指導教授以外の2人の審査員が十分満足するまで続けられる。審査員が満足できないこともあり、その場合、学生は博士論文を改訂し3カ月かそれ以降に再度、試問を受ける。

逆にオランダの最終口頭試問は喜ばしい行事であって、学生を落とすことはない。指導教授は（しばしば学生と一緒に）、他大学からの数人を含む約5人か6人の大学教授（あるいは準ずる研究者）からなる委員会を構成する。この委員会は博士論文を承認（あるいは却下）するが、特別なコメントをすることはしない。もちろん、指導教授は問題が生じそうな人物を委員会に招聘することはない。公式には大学院長が委員会を承認しなければならないが、承認するのが通常である。

したがって、博士論文口頭試問は試験ではなく、お祝い事である。これは素晴らしいことである一方、論文の質を保証するには良いことではない。そのためベルギーの例に倣って、私はティルブルグ大学で「事前口頭試問」を提案した。この事前口頭試問は、最終口頭試問予定日の3カ月前に行われる実質的には正式な

試験であり、そこでは論文の改訂が求められる。そして事前口頭試問を合格した候補者だけが最終の口頭試問に進むことができる。事前口頭試問を実施することで仕事が増え日程も遅れるので、ティルブルグ大学で私の提案が了承されたことに驚いたが、その後、オランダの幾つかの大学も同様に事前口頭試問を取り入れている。ほとんどの同僚は博士号の質の維持のための改善が必要であることに同意している。

そして重要な日。家族や友人も招かれ、パーティーが計画され、その時が来ると、職杖を持ったビードゥル（儀式の先導者、“pedel”）と審査委員がガウンを着て講堂に入場し、質問を始める。博士論文の主題に関連のある重要な質問がなされ、博士号取得候補者は厳粛に返答することが求められる。候補者の後ろには2人のパラニンフ（paranimfen）が控えており、候補者が質問に答えられなかったときにサポートする。というのは元々の役割で、今では候補者が専門とする学問には全く関係のない、幼馴染などの親友の場合も多く、ハイヒールを履いて45分間緊張しっぱなしで立って、失神してしまったパラニンフもいた。そして質問に満足に答えられなかったとしても候補者は合格する。この質疑応答は厳密に45分間続き、ビードゥルが入ってきて職杖で床を打ち、ホーラ エスト hora est! と叫ぶ。時間が来た、試問会は終わりである、という意味である。委員は何も討議することがなくても検討のために一度退場する。そして委員が再度入場する。会場の全員が博学な委員に敬意を払うため起立し、候補者は博士号を受け取る。そのうちのわずかの候補者は“cum laude”（優秀賞）を授与される。そして祝賀会、誇らしい両親、そしてパーティーと続く。

ヤン・R・マグナス アムステルダム自由大学客員教授。
最近の主な著書は *Introduction to the Theory of Econometrics*,
6th edition, VU University Press, Amsterdam (2021)。計
量経済学専攻。

いけふじ・まさこ 大阪大学大学院国際公共政策研究科
教授。マクロ経済学・環境経済学専攻。